

博士論文 要旨

リード文から見た放送ニュースの談話構造の研究

一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程 LD152001 井上裕之

放送ニュース（以下、ニュース）には、なぜリード文があるのか。それは、ニュース談話の中でどのような役割を果たしているのか。本研究は、ニュースの談話構造を、冒頭にリード文があることを起点として、明らかにすることがねらいである。

第 1 章「序章 本研究の目的と構成」では、ニュースはネット上で、目で読む機会も増えたが、元来はラジオやテレビで、耳で聞く談話であったため、音声媒体の特徴を備えていると考えられることを述べた。その上で、ジャンルの大きさに比してその談話構造は明らかになっていないという問題意識を述べた。

第 2 章「本研究の先行研究とニュース談話モデル」では、本研究に関わる先行研究を挙げた。林四郎や市川孝の談話構造の研究や、プラーク学派の Daneš.F の情報構造に関する研究、NHK 放送文化研究所に蓄積されたニュース談話に関する研究などを挙げた。また、本研究のニュース談話モデルを、冒頭のリード文と本文からなる頭括式の談話として提示し、現在のニュースのリード文は、「ニュース談話冒頭にあり、多くの場合当該ニュースの要旨を示す」ものとした。

第 3 章「リード文と指示語の関係から見たニュースの談話構造」では、リード文に続く本文の第 1 文や第 2 文の冒頭に現れる指示語の数を、新聞記事と比較し、それらがどう展開されているのかを見た。2012 年の NHK ニュースから 992 本、毎日新聞記事 593 本を抽出し、リード文と本文に分けた上で、本文の第 1 文冒頭と第 2 文冒頭に現れるコ系とソ系の指示語を調べた。その結果、ニュースに指示語が現れるのは、第 1 文冒頭で 18.9%、第 2 文冒頭で 32.7% に上ったのに対し、新聞記事ではそれぞれ、0.7%、3.9% にとどまった。ニュースの第 1 文冒頭に多いのは（以下、（ ）内は出現数）、コ系が「この」（132）、「これ」（33）、ソ系が「その」（19）で、第 2 文冒頭では「この」（125）、「これ」（87）、「こう」（22）、「その」（48）、「それ」（28）、となった。一方、新聞記事では、第 1・2 文冒頭とも出現数が 10 以下だった。

本文第1文冒頭の指示語表現を見ると、「この+ [実質的名詞] +は」(59)は、[実質的名詞]部分に「事件」「調査」「問題」などが現れ、リード文で提示された出来事や問題を「この」で指して、その成り立ちを説明する文が展開される。「この中で」(36)は、政治家などの発言を伝えるニュースに多く、リード文で提示した「状況」を改めて本文で受けて、発言内容を伝えている。「このうち」(20)は、リード文の状況を大ぐくりに捉え、その個別具体例に誘導する広義の接続表現として使われている。「これは」(29)は、「～ものです」とよく共起し、リード文の出来事の成り立ちのうち、主に「情報源」に誘導する流れを作り、第2文以降でリード文の主内容の詳細が伝えられる。

一方、第2文冒頭で増えた、「この中で」(35)、「このうち」(25)、「このため」(14)などの「この+ [形式名詞]」は、第1文の内容を状況として捉え、第2文でその内訳や、因果関係・時間経過で導かれる内容を示す表現である。「これについて」(33)、「これを受けて」(20)、「これは」(13)、「こうした中」(19)などもやはり第1文の提示内容を状況として捉えてニュースを展開させる、定型化した広義の接続表現である。「その上で」(32)は人物の発言を示す中で、また「それによりますと」(28)は情報源を提示した第1文を受けて、それぞれニュースの主内容に誘導している。

指示語の多用の理由には、放送メディアの同時性や、一方向性の音声メディアにおける文脈維持が挙げられる。コ系の多用は、「この+形式名詞」の場合など)先行文脈を状況として受けていること、今という時間を軸にした直示性、論理というより事実に基づく結びつき、テレビでの映像との親和性、などの理由が考えられた。

第4章「リード文とその反復から見た放送ニュースの談話構造」では、リード文の述部が本文でどのような反復するかを調べた。これは、▼リード文述部の本文での反復の分布(位置、数、順序)を見ることで、リード文と本文の対応関係を明らかにする、▼リード文述部と本文の反復の表現形式の違いを分類し、述部が主題部に現れるケースなどを抽出することで、文脈展開を見る、などのねらいがある。リード文の述部は、当該ニュースの社会的な面での新しさと、テーマ/レーマで表される文の情報構造の面での新しさを併せ持ち、主節および、いわゆる重文の従属節の述部に絞って反復を調査した。本文ではリード文述部の類義表現を、事実性を重視しながら抽出した。

2012年のNHKニュース125本を調べた結果、110本(88%)の本文に合計285例の反復が現れた。反復の出現位置は、本文第2文での出現が最も多く、次いで第1文、第3文の順だった。リード文でより前方に現れた述部に対応する反復は、本文でもより前方に現れ、述部が後ろに行くに従って対応する反復も後ろで現れる傾向があった。反復の出現順序は、対応するリード文述部と同じ順序での出現が最も多かった。これらの位置や順序から、リード文と本文が相似形をなす「相似型」のニュースが典型的と考えられ、この中には反復が複数の文に現れる「反復増加型」や、反復が1つの文に現れる「反復非増加型」があった。一方、出現順序がリード文と逆転するものには、反復が本文第1文の主題部で見られる「本文冒頭承前型」、本文末尾で見られる「本文末尾反復型」などがあった。

反復表現は、リード文述部の表現が (a) 本文に全く同じかたちで現れるもの、(b) 本文でも述部として現れ、その表現の違いが言語形式や形式名詞等に関わる違いにとどまるもの、(c) 本文では述部以外で現れたり、ボイスなどが異なる形で現れたりするもの、(d) a、b、c に当てはまらない別の表現で本文に現れるもの、の 4 種類に分類した。その結果、b が最多となり、d、a と続き、c が最少であった。出現位置は、a、b、d は本文第 2 文、c が本文第 1 文で最も多かった。上記の相似型には a、b、d が多く現れたが、「本文冒頭承前型」には c が多かった。「本文冒頭承前型」は、例えば「…が逮捕されました。逮捕されたのは…」のように、リード文述部が本文第 1 文主題部に引き継がれる、いわゆる「逮捕原稿」が多く見られ、談話に「流れ」を与えていると考えられた。「本文末尾反復型」には、談話に「書き納め」を与えていることが見て取れた。相似型が多いのは、リード文が要旨としての機能を持つという、従来から考えられている理由が挙げられるが、ラジオ時代のニュースには反復は義務的でなく、現在のニュースの反復出現文に、描写の表現が現れることなどから、映像との関係があると捉えられた。テレビニュースは、本文の部分に映像を伴うが、リード文の主内容は、その出来事が撮影されることで映像にも収められるため、主内容を再び表す映像に呼応する表現が必要となり、反復として現れる可能性があると考えられた。

第 5 章「草創期のラジオニュースにおけるリード文の形成」では、ラジオ放送の初期から、リード文が作られていたことを、ラジオ草創期の放送用語委員会などの資料をもとに明らかにした。戦前、ラジオ放送をしていたのは日本放送協会だけであるが、当時協会は自主取材をしておらず、通信社からの配信原稿の文末を常体から敬体に書き換えるなどしてニュースとして読み上げていた。協会内に設置された放送用語委員会では、ニュースにリード文を付加することが推奨されており、当時の資料には、配信原稿の見出しを、リード文に書き換える例が複数残されていた。それらを調べると、リード文は配信原稿の見出しを中核情報とし、本文の語句をそこに肉付けするように作られていた。見出しも本文の語句から作られているので、この結果、リード文と本文には語句の反復が現れるようになった。一方、大阪放送局などでは、リード文が付加されずに放送されていたと考えられる記録もあった。反復は、伝えたい内容の強調であり、聴取者の理解促進を図るものと考えられたが、一方、重複感を増すものとも考えられた。

第 6 章「戦時下のラジオニュースにおけるリード文の変遷」は、戦時下の実際の放送ニュースから、リード文が徐々に減りゆく理由を探った。戦時下のニュースはほとんど残されていないが、1937 年の原稿 25 本 (資料 A)、1941 年の音声 28 本 (資料 B)、1943 年の原稿約 500 本 (資料 C) の 3 つの資料のリード文の有無を調べ、比較した。リード文判定方法は、情報クレジットの「～発同盟」などの語句の前にあることや、元の同盟原稿があればその見出しの書き換えの記述が残っていること、それに冒頭文と本文の語句に反復があることなどを条件とした。資料が少なく簡単に比較はできないが、調査の結果リード文があったのは、資料 A は 25 本 (100%)、資料 B は 14 本 (50%)、資料 C は 59 本 (27.6%) で、1943 年時点では全体の 4 分の 1 ほどにとどまった。

リード文が減った理由には、当時の配信原稿の冒頭にあった、ニュースの全体像を示す文（準リード文）と重複するからではないかと考えられた。準リード文があればリード文がなくても内容は伝わり、リード文を付けると、直後に準リード文が現れるので、返って重複感が増すと考えられた。

一方、リード文が付けられた原稿は、大本営発表など、特に日本軍が戦果を挙げたニュースであった。日本軍が勝利に沸くニュースや戦争遂行の希望をつなぐような事実を伝える原稿には付けられ、戦争継続上、認めたくない事実を伝える原稿には付けられない傾向があった。「終戦の年にはニュースにリード文が付けられなくなっていた」という記録がNHKに残っているが、背景には、敗戦色が濃くなり、報道発表をする側に強調したいことがなくなったとき、報道する側にも強調すべきものがなくなり、リード文が付加されなくなったことが考えられた。

第7章「終章 本研究の結論と今後の課題」では、ニュースはその主内容を、冒頭のリード文、本文の反復、それに（テレビでは）それらと呼応する映像の3つの面から伝え、情報理解の確実性を高める構造をしていることを述べた。典型的な、本文第2文で反復が現れるテレビニュースを例にとれば、聞き手はリード文で主内容をまず理解し、本文第1文で主内容からいったん離れるものの、再び第2文に反復が表れることで、主内容を映像とともに改めて理解する。戦前の事例では、リード文の直後に準リード文が現れると重複感が増すためリード文は必ずしも受け入れられなかったが、反復が本文の第2文になってリード文と離れることで、その重複感が解消される。第1・第2文冒頭には特徴的な指示語表現が多く現れるが、これらによって、本文第1文でニュースの前提となる状況や情報源を示し、第2文で再び主内容へと導く形になる。指示語表現は、リード文から本文第2文までを“橋渡し”している。

残された課題としては、新聞記事との談話構造の違いや、指示語表現と反復との関係をより具体的に明らかにすることなどが挙げられる。また、資料がなく調査に至らなかった戦後のラジオ放送期のニュースを収集し、空白を埋める必要がある。また、海外のニュースと反復の有無について比較し、そこに違いがあれば、映像との呼応関係からみた日本のニュース、あるいは日本語そのものの特徴が浮かび上がるかもしれない。（以上）